

～新渡戸記念の～

『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第45回『「ライフワーク」～「生んだ果実」～』

今年、アルベルト・シュヴァイツァー（1875-1965）（1952年ノーベル平和賞受賞；ランバレネにおける外科医としての診療活動に対して）の『水と原生林のはざま』（1921年）の出版100周年記念である。筆者は無医村の鶴峠（現在人口40名）で、生まれ（1954年）、医者になろうと思ったのも、アルベルト・シュヴァイツァーの影響があったのが、鮮明に蘇ってきた。「思想的 哲学的 故郷」&「ライフワーク」を学んだものである。「アフリカ滞在が生んだ果実であって、アフリカ行きの根拠ではなかった」&「前人未踏の仕事は必ず冒険である」が、「がん哲学・外来」の実感でもあった。

「病院は 自然動物園だと、訪問者の目をおどろかせ、たのしませている」、
「多くの種類の動物が 病院をわがものがおに 歩きまわって、誰もから排斥されない」、
「生命は尊重され、—— 訪問者の土産話となる」などなど、若き日アルベルト・シュヴァイツァー 研究者 野村 実 医師（1901-1996）著作『医師と倫理』を読んだ。まさに、「病院の動物園化」であり、バーチャル「樋野動物園」が2年前（2019年）に開設された。人生は、「不連続の連続性」である。

宇都宮教会:河野 博好 牧師から写真が送られてきた（画像）。「写真は、（2021年2月）15日夕方、小雨の中、栃木県庁（中央建物）上空に 架かった虹です。うっすらと 二重になっております。13日深夜の地震の後、神の希望の約束をノアの大洪水の出来事と共に覚えました。」との心温まるメールを頂いた。

